



Title	紀伊地域における初期須恵器生産および土師器生産にみえる影響関係
Author(s)	仲辻, 慧大
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 319-328
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紀伊地域における初期須恵器生産および 土師器生産にみえる影響関係

仲 辻 慧 大

はじめに

古墳時代中期の時代的特徴の一つとして、手工業生産の各分野において朝鮮半島からの渡来人により新たな技術がもたらされたことが挙げられる。土器生産においては、窖窯を用いた還元焰焼成による硬質の須恵器生産が開始され、在来の酸化焰焼成による軟質の土師器とあわせて、日本列島においては大きく二種類の土器が存在することとなった。須恵器生産の開始期においては、大阪府陶邑窯跡群のほか、九州、四国、中国、近畿といった瀬戸内海周辺の各地において初期須恵器窯が見つかったが、その多くは陶邑窯跡群の技術とは異なる系譜の技術導入によって開窯したと考えられている。紀伊地域北部の紀ノ川下流域（図1）においても、窯跡は見つからないものの、特徴的な初期須恵器である「楠見式土器」の集中的な分布が

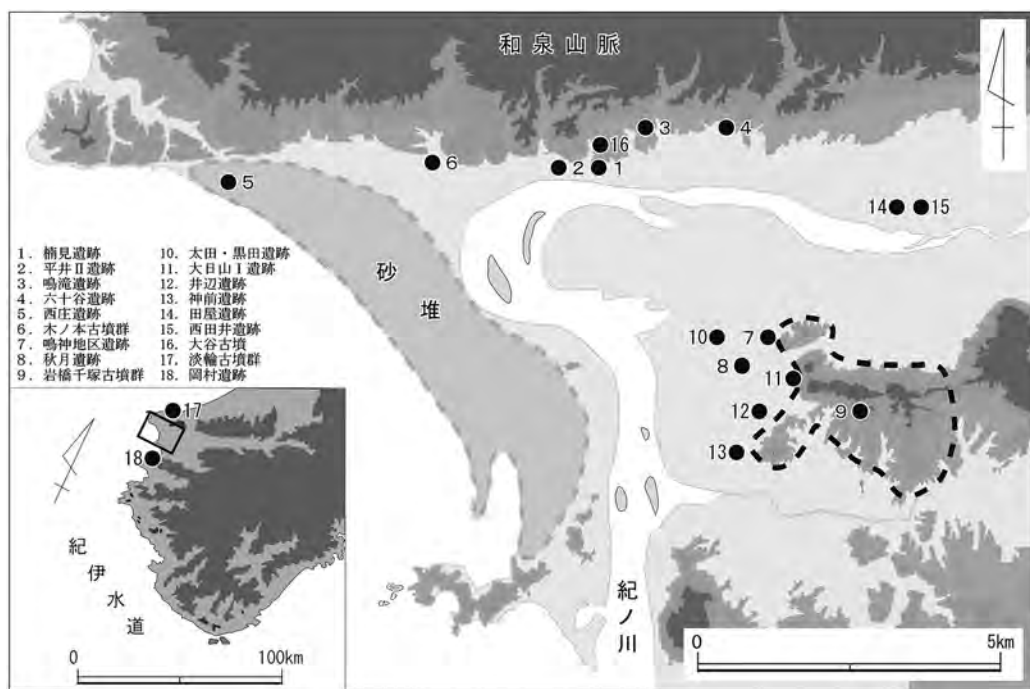


図1 関連遺跡の位置

みられ、初期須恵器が生産されていた地域の一つと考えられている。

楠見式土器は、陶邑系須恵器と比較して、多くの独自色を有している（図2）。特徴の一つとして、甕・壺・高杯の外面に横方向の平行タタキ目をもつことが挙げられる⁽¹⁾。一方、軟質の土器においても、新たな調理具である韓式系軟質土器が渡来人によってもたらされるが、紀ノ川下流域においては、楠見式土器と同様に韓式系軟質土器および土師器においても、横方向の平行タタキ目をもつ資料が確認できる。このような須恵器と土師器に共通する特徴については、これまで十分な検討がなされていない。そのため、本稿においては、これらの土器の出土状況、消長について整理した上で、当該時期における紀ノ川下流域の土器生産体制について検討することとしたい。

1. 研究史

（1）楠見式土器について

楠見式土器の認識は、1969年に和歌山市所在の楠見遺跡における発掘調査において特徴的な硬質の土器が多量に出土したことにはじまる。調査は、楠見小学校の改築工事に伴い関西大学考古学研究室が実施し、綾杉文や鋸歯文などのヘラ描文のほかに、組紐文や波状文などの櫛描文、押型による円環文といった各種の文様や蕨手状の粘土装飾を施す高杯形器台と筒形器台、肩部に乳状突起を有する大型の甕、菱形の刺突文を脚部に施す無蓋高杯など、当時、陶邑窯跡群から見つかった須恵器とは異なる特徴をもっていたことから、1972年に刊行された報告書において、これらの土器を「楠見式」と呼称することが提唱された（藺田編1972）。

その後、1970年代以降になると、開発に伴う発掘調査が増加したことに比例して、同一の特徴を有する須恵器が和歌山市の鳴神地区遺跡や鳴滝遺跡などにおいて相次いで出土し、楠見式土器が紀ノ川下流域において集中的に分布する土器であることが分かった。さらに、福岡県の朝倉窯跡群や香川県の三谷三郎池西岸窯跡など、瀬戸内海周辺の各地において初期須恵器窯の発見が相次いだことから、紀ノ川下流域においても独自の初期須恵器が生産されていたことが想定されるようになった（武内1983・1984、富加見1999、前田2001、木下2015など）。また、その系譜については、朝鮮半島の大加耶地域や金官加耶地域、小加耶地域など複数地域の特徴を有している（朴2001、木下2015など）。

近年では、田中元浩によって紀ノ川下流域の古墳時代中期の集落を対象に渡来系遺物を中心に整理がなされ、あわせて「楠見式土器」についてもその特徴と出土遺跡がまとめられている（田中2012）。また、筆者は、楠見式土器がその型式的特点から、初現期段階の須恵器と考えられていたことに対し、各地の初期須恵器窯出土品とを横断的に比較しつつ、あわせて共伴する陶邑系須恵器との比較を行い、楠見式土器がTK216型式期を中心とする時期の須恵器であると整

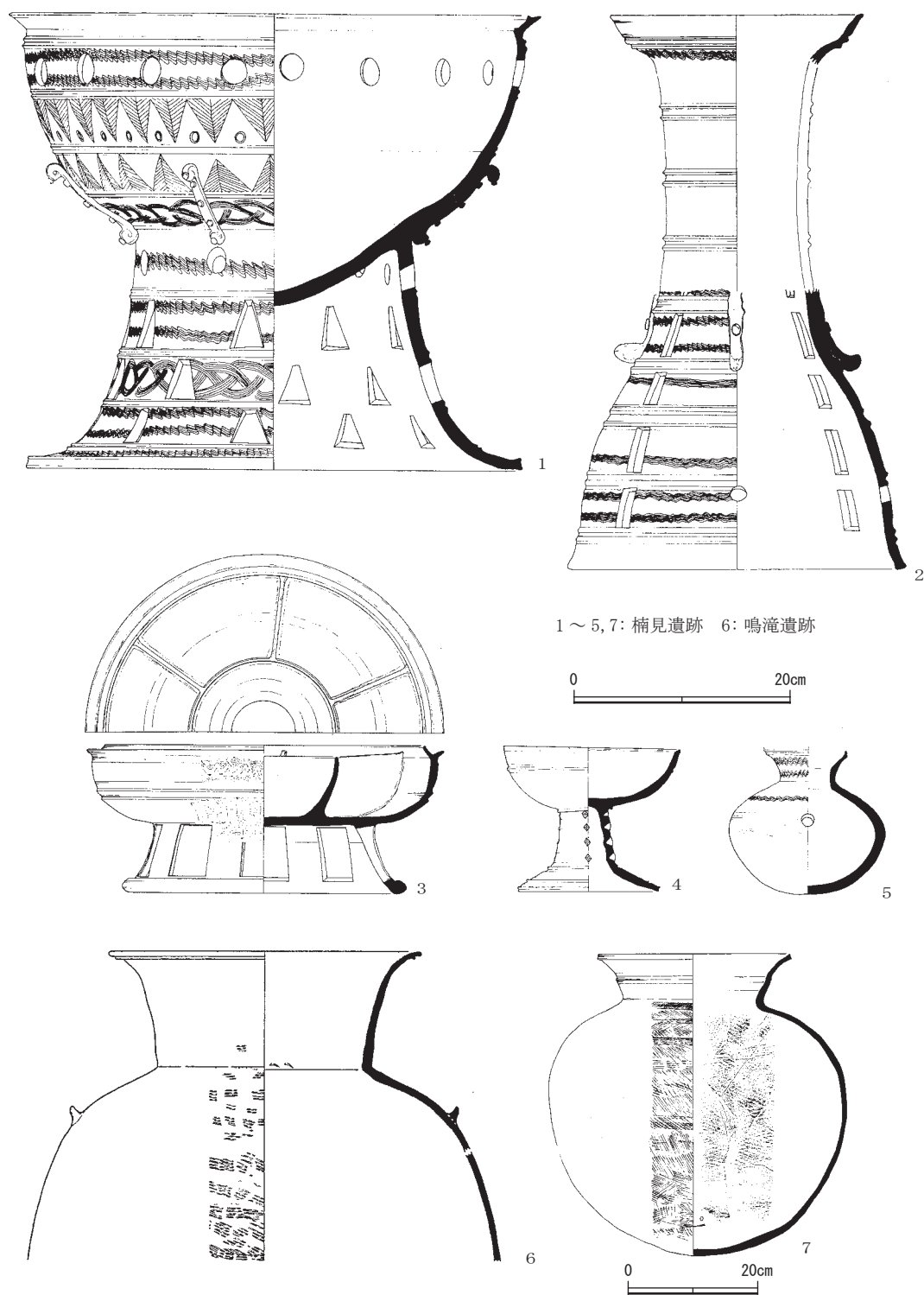


図2 楠見式土器の例

理した上で、外面調整としてハケ目を施すことや、土師器の高杯脚部と同様の製作技術をもつ高杯が存在すること、土師器の器形ではあるものの還元炎焼成された製品が確認できることなどから、楠見式土器が複数地域に由来する渡来系工人に加えて土師器工人が須恵器生産体制に組み込まれて生産が開始されたことを指摘した（仲辻 2017）。

（２）韓式系軟質土器について

韓式系軟質土器については、田中元浩により楠見式土器とあわせて整理が行われている（田中 2012）。これまで、長胴甕、甗、鍋、平底鉢などの器種が鳴神地区遺跡、西庄遺跡、田屋遺跡など、紀ノ川下流域の複数の遺跡において出土が確認されているが、こうしたあり方は、古墳時代中期における他地域の集落遺跡と共通するあり方である。ただし、横方向のタタキ目については、紀ノ川下流域における地域的特徴として抽出が可能であり、他地域においては、格子タタキ目、縦方向の平行タタキ目が通有的であることと対照的である。横方向のタタキ目の系譜については、寺井誠は朝鮮半島の慶尚南道西部地域にみられる技術であるとする。また、紀伊地域の土師器壺にみられる底部丸底化のタタキ成形についても、朝鮮半島に由来する土器製作技術として整理している（寺井 2016）。また、中久保辰夫は、紀伊地域における韓式系軟質土器について、外面をハケ目により調整する「定着型軟質土器」が生産されている一方で、中期後葉においてもタタキ技法を用いていることを特徴点として指摘している（中久保 2017）。また、木下亘は、楠見式土器の横方向のタタキ目の技法に注目し、楠見式土器の技術が淡輪古墳群における埴輪生産に影響を与えていることや、土師器生産に痕跡として残存している可能性について述べている（木下 2023）。

以上のとおり、これまで紀ノ川下流域における須恵器と韓式系軟質土器を含む土師器の生産については、それぞれにおける系譜や変遷の検討が行われているものの、総合的な検討が十分に行われている状況ではない。そのため、次節においては、紀ノ川下流域の集落遺跡から出土した楠見式土器と横方向のタタキ目をもつ軟質土器および土師器の出土状況について時期別に追うこととし、そこからみえる紀ノ川下流域における土器生産の特質について検討を行いたい。

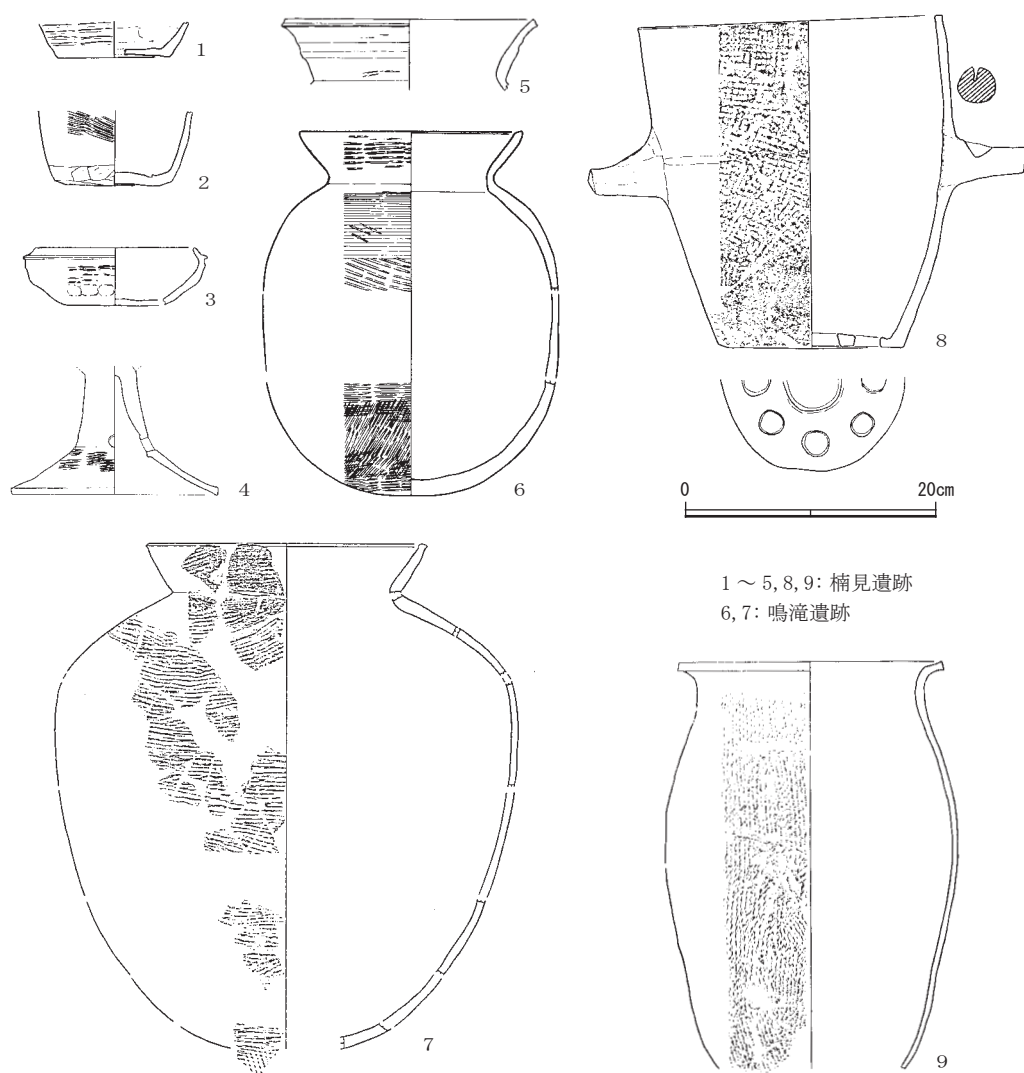
２．紀ノ川下流域における横方向タタキ目をもつ土器について

（１）５世紀前葉（TK73 ～ TK216 型式期）

本稿においては、初期須恵器段階である TK73 ～ TK216 型式期を 5 世紀前葉とする。紀ノ川下流域においては、楠見式土器、すなわち初期須恵器が生産された時期である。楠見式土器は、先述のとおり、和歌山市の楠見遺跡をはじめ、平井Ⅱ遺跡、鳴滝遺跡、鳴神地区遺跡、秋月遺跡、田屋遺跡、海南市の岡村遺跡において出土が確認されており、紀ノ川下流域一帯において

集中的な分布がみられる。標識資料となった楠見遺跡の調査では、装飾が激しい器台、乳状突起をもつ大型の甕、頸部中位に突線を有する小型の甕、刺突文を有する無蓋高杯、腿が出土している（図2）。鳴滝地区遺跡においては、大型倉庫群が6棟見つかっており、柱穴などから、大型の甕の破片が多量に見つまっている。その容量は300リットルを超え、液体の保存が行われていたことが想定される。また、鳴神地区遺跡や秋月遺跡においても、大型の甕や頸部中位に突線を有する小型の甕など、外面に横方向のタタキ目をもつものが見つまっている。

一方、土師器については、鳴滝遺跡において、横方向のタタキ目をもつ土師器甕（図3・6・7）の出土がみられる。カキ目や横ナデといったロクロによる回転を利用した調整がみられる



1～5, 8, 9: 楠見遺跡
6, 7: 鳴滝遺跡

図3 5世紀前葉における土師器・韓式系軟質土器

ことから、須恵器工人が土師器生産を行っていたと考えられる。鳴神地区遺跡においては、本来は須恵器の器形である頸部中位に突線を有する甕（図3-5）や杯身（図3-3）についても、土師質に焼成されたものが出土している。また、高杯（図3-4）についても、須恵器と同様に脚部の裾において平行タタキにより成形する技術が用いられている。

韓式系軟質土器については、鳴神地区遺跡（音浦遺跡）の溝2において、格子タタキや縄蓆文タタキをもつ長胴甕や甗（図3-8・9）が確認できる一方で、ハケ目によって調整を行う定着型軟質土器についても一定数出土している。横方向のタタキ目をもつものは、平底鉢において確認でき（図3-1・2）、軟質土器製作者の中に、横方向のタタキ目をもつ地域を出自にもつ渡来人が存在した可能性がある。ただし、出土数からみて当該時期においては、軟質土器において横方向のタタキ目をもつものは少数であったと考えられる。

（2）5世紀中葉～後葉（TK208～TK23・47型式期）

TK208～TK23・47型式期に相当する時期である5世紀中葉から後葉にかけては、陶邑窯跡群において定型化が達成される時期であり、それまでに各地において成立した窯跡については、生産を終了するか、独自系譜による須恵器の生産がみられなくなる時期である。楠見式土器についても、装飾性の強い器台や乳状突起をもつ大型貯蔵器などの生産は当該時期において出土がみられないことから、生産されていないものと考えられる。しかしながら、西庄遺跡などにおいて、脚部の裾部に横方向のタタキ目をもつ高杯が出土していることや、鳴神地区遺跡や田屋遺跡においてプロポーシオンが陶邑系とは異なる小型器種も多数出土しており、小規模ながら、生産が継続していた可能性も考えられる。

一方、土師器および韓式系軟質土器については、5世紀中葉以降、横方向のタタキ目をもつ製品の出土が増加する。鳴神地区遺跡のほか、西庄遺跡や田屋遺跡など、当該時期において集落形成が活発化する集落においても出土が確認できるようになり、これらの遺跡からは、韓式系軟質土器である甗や鍋に横方向のタタキ目を持つ資料が多く出土している。紀ノ川下流域における甗には口縁部が湾曲して開くタイプと直線的に立ち上がるタイプがあるが、横方向のタタキ目をもつものは前者の特徴を持ち、ハケ目によって調整されるものは後者である。また、横方向のタタキ目をもつ甗の蒸気孔については、中央部に円形スカシがあり、その周囲に4または5個の楕円形のスカシを施すが、ハケ目調整のものは、中央部に円形スカシを1または2個配置し、その周囲に同一の大きさの円形スカシが多数配置するものが主体であり、軟質土器の製作集団には系統差があったと考えられる。また、球形の胴部をもつ土師器甕についても、横方向のタタキ目により成形されたもの（図4-13～17）が出土している。底部のタタキ目が胴部のタタキ目を切っており、丸底化成形によるものと考えられる。頸部中位に突線をもつ形状の甕（図4-16・17）の生産も継続しており、なかでも、口縁部のナデに回転を利用し

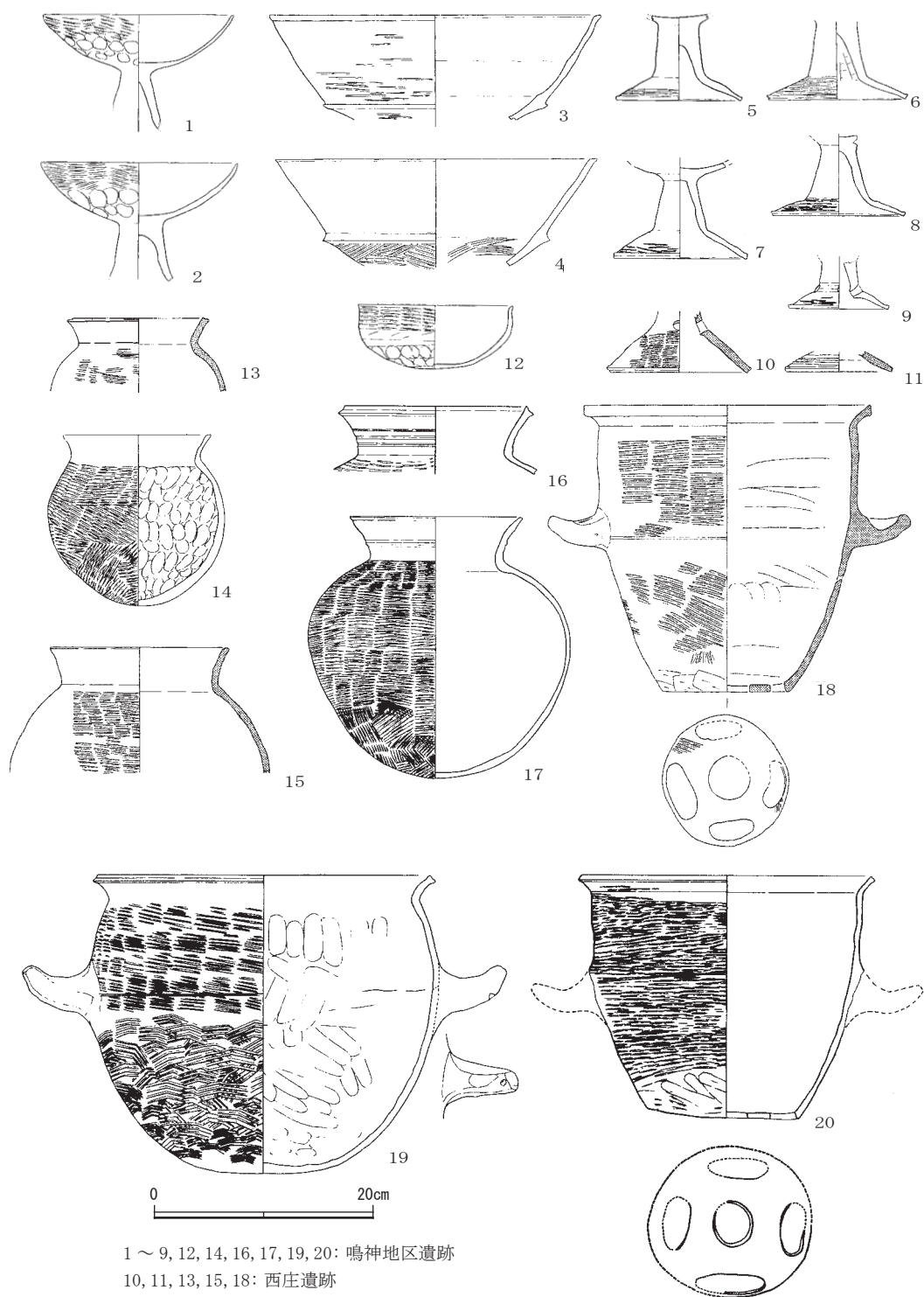


図4 5世紀中葉～後葉における土師器・韓式系軟質土器

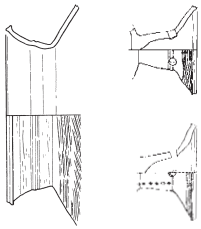
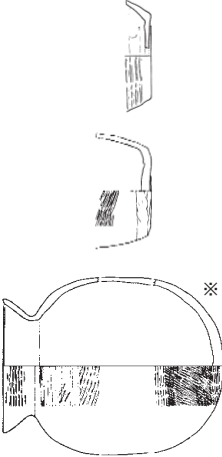
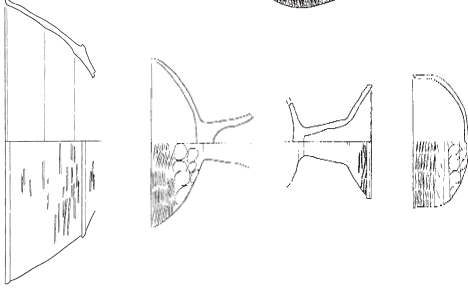
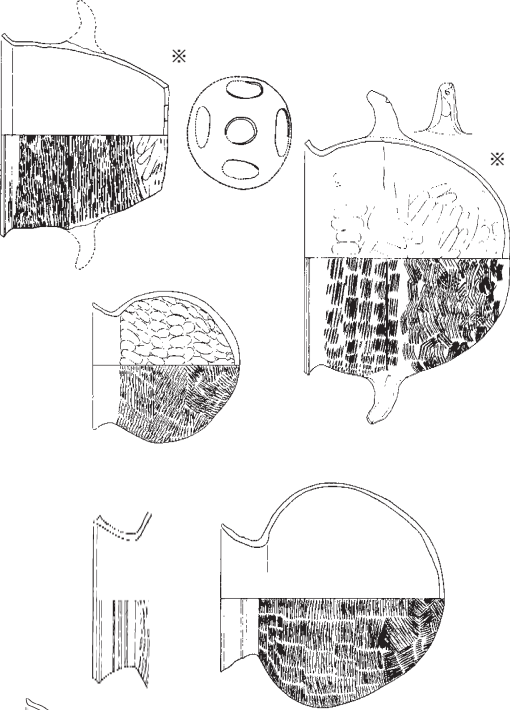
	須恵器	土師器・軟質土器
TK 73 s 216 型式期		
TK 208 s 23・47 型式期		
MT 15 型式期		 

図5 横方向のタタキ目を持つ土器の変遷および影響関係

たもの（図4-16）については、焼成が土師質であるほかは、形状・調整は須恵器のものと同一である。さらに、高杯（図4-1～11）についても、杯部外面に横方向の平行タタキ目が確認できる一群がみられ、脚部についても裾部にタタキ目を残すものが多数出土している。

しかし、古墳時代後期の6世紀においては、横方向のタタキ目をもつ資料はほとんどみられなくなり、土師器の外面調整はハケによるものがほとんどとなる。しかしながら、甕や鍋においては、胴部から口縁部にかけて横方向のタタキ目をもつ資料がみられることから、小規模ながら生産が継続していたことがうかがえる。

ま と め

以上のとおり、紀ノ川下流域における横方向のタタキ目をもつ須恵器および土師器・韓式系軟質土器を対象に時期的変遷について整理した結果、5世紀前葉の楠見式土器から切り替わるように、5世紀中葉以降、横方向のタタキ目をもつ土師器が増加することが指摘できる（図5）。この点については、当該時期に新たに朝鮮半島から横方向のタタキ目をもつ技術者が渡来したと考えることもできるが、初期須恵器生産段階からすでに、須恵器において用いられていた製作技術をもつ土師器があること、須恵器において生産されていた器種が5世紀後葉においても土師器として生産されていることが確認できることから、須恵器製作技術からの継続性としてみる蓋然性の方が高いと考えられる。そのため、陶邑窯からの技術導入によらない独自技術の須恵器生産が何かしらの理由で終了したあとにおいても、土師器生産において同一の技術が継続していることから、これらの製作集団は同一かもしくは密接な技術交流があったものと考えられる。

以上のことから、5世紀後葉における紀ノ川下流域における韓式系軟質土器の生産については、定着型軟質土器の生産が継続している一方で、須恵器に由来する技術との関わりが深かった集団により新たに生産されたものが一定数含まれ、その供給域についても紀ノ川下流域に広く分布している。これは、須恵器生産終了に伴い、当該地域においてさらに受容が高まった軟質土器の生産に対応するため、土師器および韓式系軟質土器の生産体制に須恵器に由来する技術集団が組み込まれたものと考えられる。

謝 辞

本日まで、私が考古学を続けてこられているのは、福永伸哉先生、高橋照彦先生、寺前直人先生、中久辰辰夫先生による学生時代の御指導によるものと年を追うごとに実感します。あらためて、これまでの御指導に感謝申し上げます。

註

- (1) 横方向のタタキ目を有する初期須恵器については、奈良県御所市の南郷遺跡群の極楽寺ヒビキ遺跡から、口縁部から肩部にかけてタタキ目をもつ中型甕が出土しているほか、福岡県立山山 24 号墳出土の中型甕が挙げられる。

引用・参考文献

- 木下 亘 2015 「楠見式土器の再検討」『友情の考古学 故孫明助先生追慕論文集』故孫明助先生追慕論文集刊行委員会、韓国：pp. 625-640
- 木下 亘 2023 「初期須恵器に見られる地域色—和歌山県紀ノ川下流域を中心として—」『橿原考古学研究所論集』第十八、奈良県立橿原考古学研究所、奈良：pp. 165-640
- 財団法人和歌山県文化財センター 1990 『田屋遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人和歌山県文化財センター 2003 『西庄遺跡』
- 藺田香融編 1972 『和歌山市における古墳文化』
- 武内雅人編 1983 『鳴滝遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会
- 武内雅人 1984 「遺跡・遺構・遺物」『鳴滝遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会
- 田中元浩 2012 「紀伊地域—紀ノ川流域を中心として—」『集落から探る古墳時代中期の地域社会—渡来文化の受容と手工業生産—』古代学研究会、大阪：pp. 73-88
- 寺井 誠 2016 「4～5 世紀の近畿地域を中心とした土器と渡来人集落」『日韓 4～5 世紀の土器・鉄器生産と集落』『日韓交渉の考古学—古墳時代—』研究会、福岡：pp. 103-118
- 中久保辰夫 2017 「韓式系軟質土器の受容にみる集団関係」『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会、大阪：pp. 149-150
- 仲辻慧大 2017 「楠見式土器の生産とその特質」『考古学・博物館学の風景—中村浩先生古稀記念論文集—』中村浩先生古稀記念論文集刊行会、東京：pp. 24-27
- 富加見泰彦 1999 「紀伊の須恵器生産について」『紀伊・砂羅之谷—窯跡群発掘調査報告書—』大谷女子大学資料館、大阪：pp. 44-51
- 前田敬彦編 2001 『渡来文化の波』和歌山市立博物館
- 朴天秀 2001 「三国・古墳時代における韓・日交渉」『渡来文化の波』和歌山市立博物館、和歌山：pp. 69-90
- 和歌山県教育委員会 1984a 『鳴滝遺跡発掘調査報告書』
- 和歌山県教育委員会 1984b 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』

挿図出典

第 1 図 筆者作成

第 2～5 図 藺田編 1972、和歌山県教育委員会 1984a・b、財団法人和歌山県文化財センター 2003 をもとに筆者作成